

合 同

No. 5 0 0

「祝福に満ちた希望（インマヌエル）」

板橋教会牧師

臼田 尚樹



今年もクリスマスの時節になりました。11月30日から4本のアドベントキャンドル（3本目がピンク色で他は紫色）に1本ずつ明かりが灯ります。それぞれのキャンドルが表す意味は「希望、平和、喜び、愛」です。最後に中央の白いキャンドル（キリストのキャンドル—the Christ candle）に明かりが灯され、クリスマスを迎えます。

第1キャンドルに輝く光は「希望」です。世界中に希望の光が輝くように願いながら、何よりもわたしたちの心の芯に希望の光が灯るように祈ります。アドベントには、主の降誕の恵みへの想いと、主の再臨の希望を待望する想いが満ちています。

テトスへの手紙2章13節は次のように語っています。「（神の恵みは）……祝福に満ちた希望、すなわち偉大なる神であり、わたしたちの救い主であるイエス・キリストの栄光の現れを待ち望むように教えています」。そうなのです！主イエス・キリストの再臨は、想像を絶する「祝福に満ちた希望」なのです。

ナチス・ドイツのホロコーストを生き抜いた「夜と霧」の著者ビクトール・フランクルは、強制収容所からいつの日か解放されると信じ、その解放された未来に立って、現在の苦しみを回想しました。それが、生きる意味と勇気を保ち続ける秘策でした。それは、やはりホロコーストを描いたイタリア映画「ライフ・イズ・ビューティフル」（実話ではないが感動するストーリー）のテーマにもなっています。それらのテーマは「希望」です。人間が極限状態を生き抜く、しかも勇ましく生き抜くことができる主要なテーマは「希望」なのです。

ヘブライ人への手紙10章23節には「約束してくださいましたのは真実な方なので、公に言い表した希望を揺るがぬようしっかり保ちましょう」とあります。「公に言い表した希望」とは、わたしたちの信仰告白です。新改訳2017では「しっかりと希望を告白し続けようではありませんか」と訳され

ています。「しっかりと保つ」とは、「しっかりと告白し続ける」ことなのです。当時、ヘブライ人への手紙は、迫害と不安のただ中にいた信徒たちに語られました。今を生きることが非常に厳しい人たちに向けて告げられたのです。

わたしたちも、現代という不安の時代に生きています。戦争の報道や災害、孤独や病の痛みの中で、希望を保つことは容易ではありません。しかし、ヘブライ人への手紙の「希望」とは、神の真実な約束に基づく希望です。神は、わたしたちの罪を赦し、永遠の命を与えるために、御子イエス・キリストを救い主としてこの世に遣わされました。そして、わたしたちに希望にあふれる神の御国を与えるために、イエス・キリストは王の王として再び来られることを約束されました。今、主が再び来られるのを待ち望みながら、わたしたちはこの再臨の希望を「公に言い表す」ように招かれています。「教会は、公の礼拝を守り、福音を正しく宣べ伝え、洗礼と聖餐との聖礼典を執り行い、霊的に成長し、愛の業に励みながら、主が再び来られるのを待ち望みます」（日本キリスト合同教会信仰告白より）。

アドベントキャンドルの1本目に灯される希望の光を見つめましょう。その光の名こそ「インマヌエル」——「神は我々と共におられる」お方です。アドベントは、過去・現在・未来の三つの時空を繋いでいます。キリストが来られた出来事を思い起こし（過去）、主が今ここにおられることを信じ（現在）、主が再び来られる約束を待ち望む（未来）のです。その三つの時空の中心に、インマヌエルなる「真実な方」、イエス・キリストが立っておられます。そのお方が、昨日も今日も、そして明日もわたしたちと共におられます。なんという希望でしょうか。その中心にあるのは神の愛です。神はわたしたち一人ひとりをどれほど愛しておられることでしょうか。わたしたちは神をどこまで知っても神の愛を知り尽くすことはできません。無限の愛にあふれる神は、わたしたちそれぞれに崇高な目的を持っておられるのです。それこそが「祝福に満ちた希望」という神の恵みです。

最後に記すパウロの祈りは、まさにアドベントの祈りです。みごとに「希望、平和、喜び」が含まれています。「希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とであなただけを満たし、聖霊の力によって希望に満ちあふれさせてくださるように」（ローマの信徒への手紙15章13節）。